



## ルーテル 藤が丘だより

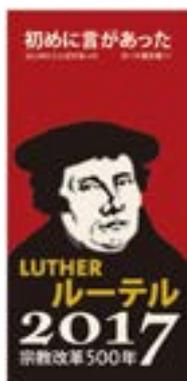
ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会  
〒 227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 牧師 佐藤和宏  
tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009  
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp  
発行 月報編集委員会 発行日 2017年11月5日 No. 42



1517-2017  
宗教改革 500 年



photo by M. Sugiura



心の貧しい人々は、幸いである、  
天の国はその人たちのものである。

マタイによる福音書 5章3節

『受け身の幸せ』

牧師 佐藤和宏

マタイ5章1節〜6節

一般的に幸せとは、「その人にとって望ましいこと、その状態」と理解されます。とある幸せに必要な要素を尋ねたアンケートでは、収入、健康、精神的ゆとりという順になったそうです。収入に不足を感じないこと、健康であること、精神的にゆとりをもっていること、大きな割合で人々はこれらを「望ましいこと、その状態」としているということなのでしょう。しかしよく考えてみますと、収入や健康はもちろん、精神的ゆとりもその環境が整えられることではじめて得られるゆとりですから、いずれも外側にあるものを獲得する、いわゆる能動的な幸せなのではないかと思うのです。

それでは聖書は幸せについてのどのような言っているのでしょうか。

主イエスは山上の説教の冒頭で教えておられます。「心の貧しい人々は、幸いである。悲しむ人々は、幸いであ

る。柔和な人々は、幸いである。義に飢え渴く人々は、幸いである」と。

「心の貧しい人」「悲しむ人」「柔和な人」「義に飢え渴く人」が幸いであると言われているのは、私たちには不思議にみえます。なぜなら、一般的に幸せであることと正反対に位置づけられるように思われるからです。その内容をみてまいりますと、「心の貧しい人」「悲しむ人」についてはわかりやすいのですが、「柔和な人」についてどのようにとらえたいかわかりにくい部分があるかもしれません。「柔和な人」が幸いとされるのは、他の「幸い」とされる人々に比べると、当然のように思われるからです。これは詩編37編からの引用で、新共同訳では「貧しい者」、口語訳では「柔和な者」となっています。そして、ここで用いられているヘブライ語は、本来「従う」という意味になるそうです。つまり「神に従う」ことで、この世において虐げられていた人々を幸いとしているのです。「義に飢え渴く」ということも、これに似ていると言えるでしょう。

このようにこの世では否定され、幸せとは程遠い存在とされる人々を指して、主イエスは「幸いである」と言

われているのです。そして同時に、その理由が明らかにされています。「天の国はその人たちのものである。その人たちは慰められる。その人たちは地を受け継ぐ。その人たちは満たされる」と。この世からするなら「幸い」と見なされない人々ですが、神はその人々をそのままにはしておかれず、その人々を満たされるのです。このように神の恵みを受けるので、これらの人々は幸いとされるのです。

「幸いである」と訳されているギリシャ語は、元来神々に使われ、その恵まれた状態、すなわち煩いや死のない、働く必要もない至高の幸福を表す言葉であったようです。やがて人間にも使われるようになり、思い煩いや苦悩から自由な人を表すようになったと言われます。この世における幸せの条件を能動的に、すなわち自らの努力で満たすことのできない人々を深く憐れまれる神は、この世の幸せの条件を手に入れようと労苦し、失うまいと思ひ煩う生き方から解放された自由な者と見なし、彼らを天の国に招き入れ、慰め、地を受け継がせ、満たされるのです。この神の憐れみを受けて、受動的に人はまことの幸

せに招き入れられるのです。

徳善先生が紹介された「あなたの義をもってわたしをお助けください」という詩編の言葉は、口語訳聖書の訳になります。「新共同訳聖書はマルチン・ルターの認識に沿って、少し意識したからです。「新共同訳はこう訳しているのです。『恵みのみわざによってわたしを助けてください』。」「恵み」とは、神からの無償の賜物、すなわち神のプレゼントにほかなりません。神のプレゼントを受けて神の義は「私たちの義」となった、受動的な義であるというルターの見解を、新共同訳聖書は「あなたの義」を「恵みのみわざ」と訳すことで、明らかにしているのです。

人は幼いとき、あるいは年を重ねて高齢となつて、さらには病により、あるいは弱さのゆえに誰かにしてもらうことが多くなるでしょう。それは時に自らを情けなく感じる時があるかもしれません。しかし今日、主イエスはどのように受け身とならざるを得ない私たちを深く憐れみ恵みを注ぎ、まことの幸せのないちに生きる者とされるのです。(宗教改革主日)

## ■東南アジアの最南端から

○田○郎

ジャカルタは赤道の少し南で南回帰線よりは北に位置しています。一年のうち約七か月は太陽が北にあり五か月は南にあることとなります。北向きの部屋に住む私は、日当たりが良い七か月間、日本と逆に右（東）から昇って左（西）に沈む太陽を眺めて暮らすのです。イメージし易い一例をとりあげましたが、慣れ親し



んだ生活感覚との違いは自然にも社会にも至る所に見受けられます。それに敏感に順応するのか、我々の慣例を押し通すのか、あるいは違いを克服する第三の方法を生むのか、が、営業や経営に関わる課題なのです。普遍性優先か特殊性重視かという問いでもあり、ほかの国での成功事例がこの国でも通用するのか、あるいはこの国では何が一番効率的なのか、各社の日本人駐在の多くが日々手探りをしています。

今の私は、定年延長で海外赴任の身。任地インドネシアの印象は強烈で、日々の感慨は様々、悲喜はさらにもこもこ。十四年に及ぶ海外勤務は、米国・中国・インドネシアと人口大国ばかりでした。米国では幸運にも三大都市部を転勤するのみでしたので、デイトプ・サウスと呼ばれる米国南部のような地域に勤務する日本人にはいつも畏敬の念を感じていたものです。いまアジアに赴任しているのは、インドネシアこそがアジアのデイトプ・サウス。

印象的なその素顔を少々スケッチ



易に歩けない歩道、挟み撃ち強盗を避けるために敬遠する歩道橋、曖昧な時制の言語に起因する時間感覚の食い違い、声高に浄化運動が叫ばれるほど蔓延してきた前時代的な商習慣など。滞在する日本人の多くはそれでも、インドネシア人の笑顔や温かさや素朴さに安らぎを得つつ、いつも夏風が気持ちよく渡るこの島嶼国家で、あり得るべき日系企業像や日系居住者像を模索しているので

## ■女性会だより

10月22日礼拝後、アジア学院からの来訪者ネリー・シエラさんと通訳の菊池さんの歓迎昼食会を兼ねて、女性プラス男性参加で行われました。出席28名

250以上の部族からなるカメルーンという国の多様性について、女性や若者への教育、健康に対する意識啓発、リサイクルや太陽光発電での環境への配慮、そして、貧しい人々の生活の質向上への継続的な取り組みなど、たくさん興味深いお話をしてくださりました。

